

題目 利害が異なる立場間での合意形成過程における発言分析 –除去土壌ゲームを用いた多元的共通善を巡る討議の質の評価–

氏名 近田裕亮

指導教員 大沼進

本文

従来の公共的討議の評価は、これまで合意結果や参加者の態度変化といった結果指標を中心に行われてきたが、討議の過程において、どのような公共的価値や配慮が発話として表出しているのかは十分に検討されてこなかった。本研究は、除去土壌ゲーミングを用いて、討議内容を発話レベルで分析することにより、公共的価値や他者への配慮がどのように言語化されるのかを記述的に明らかにすることを目的とする。除去土壌とは福島第一原子力発電所事故後に伴う除染により生じたもので、2045年までの県外最終処分が法律で明記されている。この問題は地域間の負担配分の不公正を内包しており、国民的議論が求められているが、その議論の仕方や枠組みについては定まっていない。除去土壌ゲーミングは、利害が対立する当事者の交渉場面や対立のない市民諮問委員会による討議場面などからなる。発言内容の評価には討議の質を発話単位で評価する指標である Discourse Quality Index (DQI) を、除去土壌ゲーミングの文脈に合わせてカスタマイズして用いた。具体的には、発話に含まれる理由づけの性質、参照される公共的価値や共通善、ならびに他者や関係主体への配慮の有無といった観点から討議内容を整理した。同ゲームを8ゲーム実施し、参加者は大学生56名であった。分析の結果、利害対立が顕在化する段階では、自己利益・自地域利益を優先する発話が相対的に多く、客観的・論理的な理由と結びついて表出する一方で、他者への配慮や負担の分け合い、他者の立場や感情を想像的に理解しようとする視点取得とは結びつきにくい傾向がみられた。他方、負担の分け合いに言及する発話は、複数の公共的価値や他者配慮、視点取得と同時に生じられやすく、市民諮問段階で設定された達成条件の達成回数とも関連が見られた。利害対立がなく全員が同じ立場から社会全体の望ましさを議論する市民諮問段階では、公共的価値や配慮に関する発話は全体として少なく、これらの価値が暗黙の前提として共有されていた可能性が示唆された。本研究では、DQIは利害対立が明確な局面では討議の特徴を的確に記述するうえで有効である一方、利害対立が顕在化せず、社会全体の望ましさが暗黙の前提として共有されている場面では、その特徴を捉えにくくなるという特徴を明らかにした。